

盆地底より大川上流の山地に多く、大川・鶴沼川・宮川・湯川などで集水した大量の水が、盆地に急に流れ込んだという形で、古い記録と照合してみると、天文五年（一五三八）の六月二十八日の白鬚の水が、このような様相を呈してあったのではないかと想像される。

これは阿賀川の洪水水位と、堤防決潰によるものではあるが、氾濫が岩崎山北方より、久しぶりに、ほぼ古い旧鶴沼川、次の鶴沼川堰、現在の本郷堰・麻生堰などの通じる、対角線状の低い旧河川の跡に拡がって、濁川を併せ、佐布川付近で宮川に合流、鶴沼川に、昔を思わせる異常な幅広い氾濫をしている。

山科（喜多方市慶徳町山崎にある量水標所在地）では二十三日午前八時、七・五四メートル、宮古は二十三日午前三時、四・九〇メートルに達している。これは改修後から現在に至る最高水位であるが、大正二年の山科の一〇・一五メートル、宮古の五・五二六メートルには及ばない。雨量が大で洪水位の低いのは、山崎捷水跡開さくによる水位低下・一三八～一・一七九メートルの河底低下を入れなくてはならないが、山科量水標では、それでも遙かに低い水位に止まっている。発電所建設による猪苗代湖水位の、完全な人為的調節、その他いろいろの要因が考えられるが、河川改修の効果も顕著ではないかと思う。この際の水害調査があるが、これによると、死者一、負傷者二、住宅流失九戸、同浸水九七三戸、非住宅家屋の流失三棟、浸水五二二棟、堤防・水路の破損五九カ所、田畑の埋没四、二六六ヘクタール、この損害家屋は、当時のお金で九二、六四〇円、堤防類で七五、三一八円、耕地・収穫物で二〇、三一〇円、総計一、〇二八、九二八円に達した。

住宅の浸水、田畑の埋没をやや詳しくとりあげて、この洪水の被害地域を調べてみると、会津盆地では住宅浸水が、玉路二〇、門田八七、本郷五〇、川南五〇、神指二五〇、勝常三八、金上六二、広瀬六、川西一、坂下五八、藤川五、永井野五〇、若松市二三、町北六〇、高野五二、塩川一〇〇となり、流失は玉路五、耶麻堂島二